

高齢社会と女性

樋口 恵子

一

「高齢社会を考える」の最後を受け持たせていただくように、大変光栄に思っております。私の父親の代までは浄土真宗の一応、当主として僧籍を持ちました。その父親は後継ぎで得度名を持ちながら、学者になりたくて東京へ出て来ました。その娘が私でございますから、私は寺の娘というわけではありませんが、寺の孫というべきでございます。近親者の命日と、その前の日と、兄と私はきちんと座って父の読経に付き合わされましたの

で、「門前の小僧習わぬ経を読む」ということばもございますけれども、つい少し前までは私も記憶しておりました。

なぜ、そういうことを申し上げるかという点、お互いに仏教徒でありまして、キリスト教に義理を立てる必要は全くないのだけれど、この「ど」からきょうの話は始まります。私は別に、キリスト教に義理を立てなきゃならない筋合いは何にもありません。にもかかわらず、いま一九九七年、これはキリスト教の西暦であります。まるで世紀の変わり目に義理を立てたかのごとく、歩調を

合わせたかのごとく、いまあらゆるシステムが国際的にも、国内的にも変革の時期を迎えています。西暦の年号とは偶然の一致かもしれないけれども、たとえば行革会議の行方を含めて、国の総理のキャッチフレーズが「改革」です。

一九八九年、東西ベルリンの壁が崩れた。そこから、国際的な政治的な秩序が変わってきています。あのとき、まさかソ連がなくなるなんて夢にも思いませんでした。けれども、東西ベルリンの壁が崩れ、そのとき以降、いわゆる東ヨーロッパの共産圏の国々で続々政変が起こり、遂にソ連崩壊、ロシア及び、ロシア周辺の諸国の独立というところまで来て、いまや、いわゆる冷戦構造というかつての秩序はほぼ完全に崩壊しました。考えようによっては、共産主義というのは、民族主義の冷凍庫であつたとすら言うことも出来る。少なくとも局地的な民族紛争とか、宗教的対立というものを抑止する力を持っていたことも確かですね。それがいま、新しい秩序を模索しています。

最初に、私自身の近年の体験からお話したいと思

い。でも私はその場にあつて、何はともあれ世界が注目する中、言葉で激しく対立し論争し、血を流さず何とか妥協の行動計画をつくり上げるプロセスにささやかながらもかわつて、大きな感動を覚えました。

「高齢社会をよくする女性の会」と、「女性と健康ネットワーク」という団体がありますが、後者の方から私は政府代表団に加えられたわけです。これは自慢話ではなくて、今、国会で論議されているNPO（民間非営利組織）法案にもあるように、GO（政府）とNGO（非政府組織）の壁がようやく日本でも崩れはじめた一つの例だと思ふのです。

私はこの会議にわくわくしながら参加して、ほんとに遊びに行く時間ありませんでした。論議が紛糾して会期が延長されたおかげで、ようやく日曜日に休みがとれて、憧れのピラミッドとスフィンクスを見に行きました。カイロの市街を離れてものの三十分もすると、人はだしでロバに荷車を引かせて歩いていきます。日干しレングの土造りの農家がづく中、通訳の女性は、この付近で最近も、結婚前に妊娠してしまった娘が父親に殺さ

ます。すべて二十一世紀へ向かつてのキーワードである「国際化」「高齢化」「男女平等」の中での体験ばかりです。一九九四年というのは、東西対立の冷戦構造が崩れた代わりに、宗教的、民族的対立があちこちで強くなつてきている、その時期に入つておりました。その年カイロで開かれた国連の世界人口開発会議におきましては、いま女性のリプロダクティブライツ・ヘルスと言つて、訳せば、「性と生殖にかかわる生涯の権利と健康」が女性の重要な権利として国連に提出された年です。

翌一九九五年、北京で開かれた国連の第四回世界女性会議におきまして、十二項目の重大領域として「健康」という領域がございますが、その女性の健康の中でリプロダクティブライツ・ヘルスということがしつかりと、国連の行動綱領に書き込まれたわけでございます。私どもの政府ももちろん賛成しておりますし、国連としても採択をしています。

さて、カイロ会議では、女性の人工妊娠中絶をめぐつて、両派に分れてそれは激しい議論が延々と続きました。いまもそう簡単に両者が妥協したわけではありません

れたという話をしてくれました。父の行為は、家の名誉を守るため、家長のとるべき義務として社会的に容認されるのだそうです。同じ地球上に、いや女性のリプロダクティブ・ライツを国際的に公認すべく議論している地続きに、まだそんなことがあると思うと、私は世界の女性の人權の壮大な格差に目のくらむ、そして目の前が閉ざされていく思いでした。「安全で満足できる性生活を営みながら、いつ何人の子を生むか、生まないか、生むとすればいつか……そのために十分な教育と情報を得る権利……」などという国連の行動綱領の文章がまことに空しく感じられたのです。でも、と私は一時間余りのドライブで、あの三つのピラミッドのあるギザへたどり着くころには、根が楽天的なせいでしょうか、もう氣を取り直していました。

やれる人から、できる人から始めないでだれが始めるのか。こうした女性にとって、この世は闇に違いない。その闇を世界先進国の女性たちもどこかで共有しているからこそ、一九七五年以来、国連をあげての男女平等の運動がひろがったのだ。あかりを灯せる女から、一本の

ろうそく、一本のたいまつをかざして行くよりほかはありません。痛みを感じる感覚さえ奪われている女たちに比べれば、痛みと悲鳴をあげられる人がちゃんと声をあげていかなければ、闇から闇の中に埋もれてしまします。僅かながらでも光が灯されてこそ、実態が闇の中から見えて立ち上がってくるのです。伝統派と改革派とがしのぎを削る対立の中で、いまようやく妥協の産物として、一歩か半歩か知らないけれど、女性の人權としてリプロダクティブ・ライツが決められようとしている。地続きに置かれた女の（人間のと言いかえても同じです）闇があるからこそ、隣接するカイロの大ホールで国連の会議が開催され、ほんの少しでも事が動いていくことの意味があるのだ——と。

そして私はついにピラミッドの前に立ちました。これぞ私の憧れの人類共有の遺跡です。私は幼いころからその姿の美しさに魅かれていましたが、いく度となく写真や映画で目にしたピラミッドが、遠くから見る限り、写真そのままであることに感動しました。スフィンクスもまた、写真のとおりのかたちでおりました。私は幼い

合って美しく踊っている。腰を直角に折って杖にすがっ

て歩くのが「老人」と思っていた時代とはまるで違うのです。そもそも社交ダンスは、おたがいに腰を直角に曲げ合ったら、たがいちがいになってしまつて踊ることができません。また、杖を使えなくなるくらい体が不自由になったとしても、車椅子で外出できますし、いろいろな自助具・補助具を利用して、生涯にわたつて社会参加する高齢者の姿が増えていきます。「スフィンクスよ、知ったか。お前の質問自身、人間社会の高齢化には適応しなくなっているのだ」と私は心の中で、目の前の像に向かつて呼びかけたのです。

そして、あのピラミッドです。ピラミッドが文化財として保護されるようになったのは比較的近年のことです。それまでは盗掘も石材の採掘も思うがままだったそうです。よく見ればたしかに欠けたり荒れている様子がわかります。しかし何という造形力、建築能力のすばらしさでしょうか、少し離れて立てば、ピラミッドの姿は完璧に写真のまま、イメージのままに保たれています。いまから三千―四千年前の建築物が、きびしい自然に耐えて

ころ聞いたスフィンクスの神話を思い出し感無量でした。その物語は、正確ではないかもしれませんが、道行く旅人に、関所の番人よろしくスフィンクスが待っていて、一つの質問をします。「朝四本足で歩き、昼間は二本足で歩き、夜は三本足で歩く動物は何か」——と。これも答えられず、旅人はたしか怪獣スフィンクスの餌食になる、という話だったと思います。話の結末はともかく、その質問の内容ははっきり覚えています。実は正答は人間なんですね。人は老いては杖にすがって歩き、それでもできなくなるころには死の世界が待っていました。

スフィンクスの前に立って、私はもう十年以上も前に見たある光景を思い出しました。定年退職した都会の老年寄りの会合でしたが、七十代から八十代にかけての男女のお年寄りが、姿勢正しく社交ダンスのステップを踏んできれいに踊られるのです。あの「シャル・ウィ・ダンス？」よりはるか前、しかしいまにして思えばゲートボールを凌ぐ勢いで高齢者の間に社交ダンスが広がりはじめた走りの時期でした。七十歳を超えた男女が背筋をしつかりと立てて、杖の代わりにお互いの腕と肩を貸し

砂漠の中に立っている。

それに引きかえ、と私は思いました。人口学という学問が立ち上がってせいせい二百年、この間にその社会の人口構成を年齢別・性別に積み上げたグラフを「人口ピラミッド」と呼んでいます。大ぜい生まれ大ぜい死ぬ時代、生後間もなくから大ぜいの同世代が死んでいく時代、どの国のグラフもきれいな二等辺三角形をつくる、まさにピラミッド型でした。いま、世界のとくに先進国のグラフは、ピラミッドには似ても似つかぬ姿です。

第二次世界大戦の影響の大きい日本は、団魂の世代、その次の第二団魂の世代が大きくふくれ上がり、そろばん玉二つと言わんか清涼飲料水のボトルと言わんかです。最古の型状を保つピラミッドとは対照的に、人間世界の人口ピラミッドはその名も空しく崩れ果てているのです。いまだつたら人口ボトルとか、人口シリンドーとか名づけられるのではないのでしょうか。

人口構成というのは、その社会の文化の基盤をなしています。人口構成は個人と家族のすべてを含んでいますから、この全体図が全く様変わりしたということは、個

人、家族、男女などのあり方が質量ともに大きく転換したということです。全体像を形成しているのは個々の人間、個々の家族ですから、自分だけ昔はよかった、昔のようにやりたい、と言っても始まらないでしょう。とにかく人類にとって人口ピラミッドは崩壊したのです。それが高齢社会の到来であって、いま先進国は日本を含めて、人類にとって実に経験の浅い、とくに日本にとっては初体験と言わなければならないでしょう。いまでもいまだに変化に対応して、新しい文化を創っていかなくてはなりません。

公的介護保険の導入というのもその一つですが、きょうはこれまでのことを前提に、とくに高齢社会と女性の関係という切り口からお話したいと思います。それはそのまま高齢社会と男女の関係を語ることもなるでしょう。まず結論から先に申し上げておきます。高齢社会には男女平等がよく似合うのです。

二

高齢化と男女平等は必然の未来でありまして、この流

うことになります。これは嬉しいかどうか、よくわからないのですがね。

昔から「大は小を兼ねる」と申します。この際、大は女なんです。平均寿命が長い。したがって、人口が多い。やはり数というのはすごい力です。女の方が数が多い。大は小を兼ねる、そして高齢期における様々な加齢によるいろいろな問題を一身に受ける側は、もちろん、男の方だって同じ条件でいけば同じなんです。性別で分けた場合には、女の方がその条件の中にいるわけです。

だから、より長く生きて、老いの期間を一生に残る側の女性にあわせて様々な福祉政策などを立てておけばよいのです。つまり、核家族の中の最後の一人になりがちな女性が、その人らしく人間らしく一生を全う出来る福祉社会をつくっておけば、小の男も自動的に安らかに一生を送れるのです。だから、女性が男性のためにも頑張っているのです。

どうも、いままでの日本社会は、そういう方針決定は男の方にお任せするという傾向にありました。「さらば、

れに逆らう人と逆らわない人があると思います。高齢社会に、自分も長生きをしようと思ったら、男女を問わず、男女平等の嫌いな人は生きにくくなるから、そういう方は早めにこの世を失礼なさるか、でなければ、無駄な抵抗はやめて早く男女平等を推進する側に加わるか、どちらかなのです。私は、ぜひとも長生きをしてこの男女平等の未来を見届けてから生涯を終わりたい。仏様の側へ行くのは、それからにしようと思っています。

なぜ男女平等が必然かと言いますと、生涯一投手とか、生涯一教師とかおっしゃいますが、本当に生涯通用するのは、生涯一有権者なのです。そうすると、絶対に二十歳以上人口は女の方が多い。何たって、七歳長生きですから、未来の有権者は断然女性が増えます。二十、六十四歳までというのは、男女比は実はそんなに変わらないのです。六十五歳以上人口の女性対男性は大体、六対四です。七十歳以上、八十歳以上と上げていく度に男女の格差は開く。八十五歳以上など、二対一。だから八十五歳の年に、中学校のクラス会に行くと、男性は亡くなった人が多くて、女性の方が少なくとも二倍いるとい

お任せ民主主義。こんにちには、参画型民主主義」です。ただし、それには責任が伴います。自己決定と自己責任ということは、これは何も規制緩和の謳い文句ではなくて、むしろ、社会的規制は外してはいけないうらいのものもたくさんあると思っています。経済的規制の多くは外すべきだと思いますが、社会的規制つまり、人権に対する規制などはむしろもっとしっかりする必要があります。たとえば、確かに日本は法律の上で女性の産前・産後休暇が認められておりますし、妊娠・出産を理由に解雇することは禁じられております。それから法律の上では、育児休業は厳然として存在し、二五%の保険からの給付も実現しております。

にもかかわらず、恐らく、皆様の身近な職場でもあるのではないかと思います。世界に名だたる大企業で、「妊娠した女子社員は最後までみんな退職したんですよ」と退職を迫られる女性がどれだけいることか。育児休業はおろか、ずつとつづくの昔に労働基準法で定められている産前・産後休暇すら取れずに職場を去って行く女性がいかに多いか。はつきり言って、日本はこの点、法治

国家ではないですね。ようやく今度の男女雇用機会均等法の改正によりまして、違反の企業には実名公表のペナルティーを科すことになりましたが、遅過ぎたし、甘過ぎると思っております。

高齢化とセツトで語られることの多い少子化でありますが、少子化も高齢化も、その対策は一言です。「男女平等を本当に実現すること」です。男性と女性は性が違います。セックスの違いがあり、妊娠・出産するのは女だけです。だからこそ、この女の人が男性と同じ権利を、妊娠・出産したからといって職場を奪われない権利をしっかりと確保する。男性も、もっと家庭生活にしっかりとかわる。

ようやく政府の認識が追い付いてきました。最近になって政府が出した文書はその認識の変化を示しています。一つが、十月（一九九七年）の末に少子化社会に対する意見書を人口問題審議会が提出しております。すぐ続いて、『国民生活白書』（経済企画庁）。今年のテーマは、「働く女性」であります。そして、「新しい社会システム構築を求めて」という非常にはつきりした目標で書

かれています。

いままでの日本の男は外、女は内。あるいは、男の人は大企業で一生働くけれど、大企業に入った女性は妊娠・出産などではじき出されて、再就職をする時には良好な雇用機会はない、条件の悪いパートにしか就けないことが多いということを、——いままで現状分析としてはずっと言っていたのですが——、それをよくないことだ、日本的雇用慣行を改めて、そして男女が平等に、女の人が能力を発揮出来るようにしないと、あえて言えば、日本の未来はない。高齢社会においては、高齢者と女性が社会的生産を支えていくこと以外に方法はない、と明言しています。

そして、高学歴女性が意外に職場に出ていないのは日本ぐらいである。諸外国においては高学歴女性こそが、むしろ社会に貢献して社会で働いているということ等々……、これは世界的な流れでもう止めることの出来ない変化であると述べています。

近ごろ少子化が大変関心を呼んでいます、現在の一・四三とか一・四二という少子化の原因は、決して女

の人が社会に進出したから子供を産まなくなったのではなくて、日本の三十代前半というのは諸外国の中で一番専業主婦をしている。先進国の中ですよ。スウェーデンなどは三十五歳ぐらいの年齢で就業率はちっとも下がりません。八六・八七％の人がずっと働いている。日本はここで、三十代半ばぐらいが五〇％の労働力率に下がります。他の先進国は、皆日本とスウェーデンの間になります。

世界で一番専業主婦の率が高い国で出生率低下が起きているのです。私どもが観察していますと、少なくとももう十年前にはその傾向が顕著になっていきます。

出生率の低下というのは、女性が結婚して出産してもちゃんと仕事を続けられる機会が少ないところにある、といつても過言ではありません。そもそもお母さんが産む子供の数が減ったのではないのです。お母さんが産む子供の数は、私たちがお母さんだった時代も、いまの若いお母さんの時代も、二・二人ほど産んでおります。そう変わっていないのです。

つまり、我々の時代はほとんど皆がお母さんになっ

た。いまの三十代前半の女性は、五人に一人ほどが独身であります。我々の頃は、二十代後半で既婚者はもう八割でした。いま二十代後半で結婚している人は、半分しかおりません。初婚年齢も、どんどん上がるばかりです。我々の頃は、「クリスマスケーキになるな」。つまり、二十四歳のうちに早く結婚しろ。二十五歳を過ぎると、結婚マーケットにおける価値が下がるから」と言われました。いまは、大晦日も大丈夫です。

というわけで、私はこれを「結婚遷延症候群」と名づけておりますが、このたった十五年の変化です。日本は、世界一の大シングル社会になってしまいました。年を取ってのシングルが多いのは当たり前ですが、二十代、三十代、四十代の独身者が世界の中で最も多い国になってしまいました。少子化の最大の理由は、これでございます。

私は、このことと実は高齢化とがピタッとくっついていて、という説の持ち主なのです。実は少子化の原因が非婚化であるということはもう大ぜいが認めるようになってきました。それは男女平等のシステムが実現していな

いから、そして家族的に言うならば、日本社会における男子中心の家制度の中で、他の先進国の中で異例なことには、高齢者の介護は、まだ嫁に責任がかかりやすいことに一因があるのです。

公的介護保険が出来ましても、家族の介護というものがなくなると思えません。他の国でも家族は多くの介護を担っています。しかし、日本の特徴は、とくに同居の多い地方を中心に、東京で別居していたって、結局、お嫁さんの責任が重いことです。

私は前から、「高齢者の介護に関して、ある意味でお嫁さんを解放し、いま八五%を担っている家族介護者の女性に一極集中した介護を解放しないと結婚意欲も増さないわ」と思っています。

もう「嫁」に代表される家族の女性一人で介護できる時代ではなくなりました。それなのに「嫁」に介護負担を負わせる「文化」に固執するから、「嫁」つまり女性は結婚という枠組みから逃げ出していきます。かつての農村の「嫁」の座を改革しないまま日本の経済は発展を遂げました。その間、農家の嫁たちは表立って抵抗の女

性運動を展開する代わりに、次の代の娘たちを都市サラリーマンに「逃亡」させました。それとちょっと似た感じで、今回は女性たちが家の枠に縛られた、男女不平等な結婚から逃亡していつている感じです。

もちろん結婚する、しないは個人の自由ですし、日本の非婚率の上昇の大きな要因は、女性が結婚しなくても生きられる条件を獲得したからです。これは断然プラスの評価をしておく必要があります。かつての女性は、独身で生活できる職も少なかったし、独身でいることへの社会的圧力が強かった。差別的なことばがたくさん残っています。「売れ残り」「オールド・ミス」「嫁かず後家」なんて、ほんとにひどい。だから、女性がささやかながら経済的自立の道を得て、いやいやながらの結婚をしなくてすむようになったことは、たしかによいことです。

ただ気になるのは、家族の慣習、夫婦の平等、女性の働く権利が日本より確立している他の先進国では、それほど非婚率が高まっているわけではないのです。やはり古い慣習、とくに「介護は嫁の義務」とする家意識と、「女は結婚したら家庭に入れ」とする企業意識が結びつ

いて、結婚をためらわせているのだと思います。風が吹けば樞屋が儲かる、というよりはるかに緊密な論理法で、「老人介護の嫁一極集中は少子化につながる」と言えます。

三

さて、ここであらためて、高齢社会の中で女性の置かれた位置を見てまいりましょう。いま高齢期の女性の状況は、基本的には長いこと差別されてきた女性の、累積債務のようなものです。差別的累積債務がずっと積み重なって、老後に出てきているわけです。

まず第一に、年金の種類、額が違う。男の人は何しろ一生勤めということが前提になっていますから、たとえば、公務員の共済年金だって男の人が多いし、最大の被保険者を持つ厚生年金も男性が多い。

働いてきた人なら二階建ての年金ですが、女性は平屋建て、国民年金だけという人が、現状では半分以上なのです。

年金で日本のお年寄りの生計の半分以上は支えられて

おりますが、この年金の額がまず女性は低い。年金の種類が低い平屋建ての年金しかもらえていないということと。それから、仮りに厚生年金など被用者年金（雇用されている人が加入する年金。保険料は雇用主が半額負担する）を受給できたとしても、年金は要するに加入期間（勤続年数）と保険料（要するに賃金）と関係していますから、

安月給イコール安年金、かつ仕事を育児や介護で中断し、勤続年数が短い女性の年金はどうしても少なくなります。

いちばん最近の数字で見ると、平成八年に新しく厚生年金を貰えるようになった人全体の平均額は一八〇、六一三円ですが、男女に分けると額は男性一九八、五三九円、女性一〇六、三三七円なのです。統計というのはどうしても男女差を消去してしまいがちです。何も情報をかくしているわけではないのですが、これだけ男女差がくつきりあるものが、「平均」の中に埋没してしまっています。マス・メディアも、統計調査にあたる人々も、こうした男女格差（ジェンダー・ギャップ）に敏感になってもらう必要があります。とくに高齢期は、男女の格差

がさまざまな面で大きくなる時期ですから。

とにかく老後の経済的道づれである年金は女性が貧しい。それでは資産の面ではどうでしょうか。資産と言えは何といっても生活の基盤となる住宅です。

それでは、皆さん、持ち家に住んでいる方、手を挙げて下さい。あら、本当にそんなに手を挙げていいんですか、女の方がほとんどですけど。では、ご自分名義の家ですか、本当に。

ほら、こうやって下げてしまうでしょう。よく考えてみれば、夫名義の家の同居人に過ぎないのに、持ち家なんて気楽に手を挙げるこの世の中への甘い認識から、本日今夜を限りに決別してください。物事は、シビアに見つめなければ。

つまり、これは皆さんが悪いのではなくて、さきほどから申し上げているように日本国統計が男性中心につくられているからです。調査における持ち家の定義は、「他人の家を借りていないこと」。そうなんです。借りて家賃を払っている人、こういう人は持ち家ではない人と言います。ですから、その家の所有者及びその家族は持

協力的な夫を持ち、そうしていると中年までは気がつかないのです。だけど、やはりこの総決算の時期になって、ああ、そうか。自分はやはりこの社会の主人公ではなかったのか。夫とともに内助の功で営々とやってきたつもりだったけれど、夫だったら丸々この家が所有出来るのに……と。

年金に話を戻すと、身近にあった例ですが、一時中断したけれど、ずっと働いてきた人がいるのです。結構な所得を持っているのですが、年金年齢になってみたら、夫の遺族年金をもらった方が結果として得なんです、この場合……。『何なのよ』って言いなくなっちゃう。営々と保険料払ってきて。結局、遺族年金は無税なんです、税金がかからない。一般の年金は税金が、軽減されるもののかかります。

日本の社会システムはあくまでも社会保障もまた男を中心につくられているのです。いまこれがようやく揺らぎ始めて、今回の年金制度改革でどうなるか。いままで一生懸命やってきた人が不利になるようなことはしてはいけないけれど、一方で、二十一世紀をしっかりと見つ

ち家のカテゴリーに入ってしまうのです。ところが、その持ち家の名義は安定的・継続的な所得を持ってきた人が中心になります。夫が亡くなると、妻は相続分が二分の一でしょう。残る二分の一は、子供たちですね。

やもめになった時にどっちが惨めかというと、一見、男やもめの惨めさが目立ちます。でも、夫はその家の所有者で、妻が死のうが、ここに住み続ける権利があることに何の変わりもないのです。残された妻は、子供が、「どうぞ全部お母さんに」なんて言ってくればいいんだけど、首都圏の地価も高いし、そうは簡単にいいなのです。

ですから、夫が亡くなると、三十年来住み続けた家を手放して、子供の分は渡し、小さなマンションに引っ越す人がかなり多い。そして東京都の調査におきまして、同じ独り暮らしでも住宅困窮度が遙かに高いのは、やはり女性の側でございました。

私は累積債務の総決算と申しましたが、この年齢の方はあまり気がつかないですよ。夫もおとなしいし……。だからこそ、夜こうやって出て来られる。まあ、善良で

めて、この個人型年金というもののへ緩やかに移行していくことが社会の必然だと思っております。

しかし、いままでは女の人の存在とか、とくに女性が果たした労働を非常に綿密に消去していく装置が働いていた。女の人が働いて収入が年間百三万円以上超えてしまつと税金がかかる。それ以下は税金がかからないようにしているから、それ以上は働かなかつたことにしたり、働かないようにしていますね。それもよく考えてください、自分の収入だから自分に跳ね返ってくるなら話がわかりますが、妻が働いた結果が夫の税金に跳ね返ってくるというのはどう考えてもおかしいですよ。それから百三万円は超えても、百三十万円までならば社会保障、つまり健康保険、これから介護保険も入ってきますが、そういう社会保障上の被扶養者の立場を守れるから……。百三万円の一つの壁です。それから、配偶者特別控除がまた加わります。そして今度は百三十万円の社会保障の壁です。

女の人は独立し一人前の収入を得ないで、結婚してサラーマンの妻になったら、ほとほとのパートの方が得

なのよというシステムで、女の働きがどんな世の中から見えなくされてしまっている。家事・育児・介護という全くのアンペイドワーク、無償労働というのはもちろん見えなくされています。それ以上に、外でちゃんとパートなりで働いていても、それもまた、特にサラリーマンの妻である限り見えなくさせられているという状況が長いこと続いてきているのです。それが女の老後の経済的貧困に連動しています。

そして、あえて言います。日本の政治はその免税点を上げていくことを女性に対する善政だと思ってきたし、女たちもその中に甘んじてきた。そのことが、結果として女性の低賃金に跳ね返るという悪循環の中で、日本はいまや先進国の中でも、男性を百とすると女性は五十幾つという、世界一の男女賃金格差の開いた国になってしまったのです。それやこれやの集積が、「老いて女の貧しさ」ということになっているわけであります。

四

そればかりではありません。家族関係から言います

子や嫁という三十一四十代ぐらいまでしか考えない。これからは、主たる介護者、第二世代が主たる介護者でも六十代だと思ってください。老老介護です。

日本語は、親子と頭髮との関係を「親子共白髪」ということばを生まなかった。「夫婦共白髪」としか言っていなかった。こうしたことばもなかったことでわかるように、私たちはものすごく新しい国にきているということとを知らなければいけないのです。伝統はもちろん大事なことです。しかし、伝統というのはその社会の実態が生んだ所産でありまして、私どもがいま担っているという伝統のほとんどは人生五十年社会に生まれた伝統であります。そして、人生八十一九十年といわれる伝統は、私たちが初代としてつくり上げていくのです。

明治維新の変化に耐え、新しい時代を切り開いた一人に福沢諭吉がありますが、この方は、伝統というものはただ受け継ぐだけではない。自分たちの時代でつくるものもあるという意味の言葉を残しておられます。私は、伝統というのは受け継ぐ伝統、断ち切るべき伝統、そして自らの社会でつくり出していく伝統と三つあると思います

と、女性は最終的に独り暮らしというか、独身になることが男性よりも圧倒的に多いのです。独り暮らし高齢者の性別を見ますと、大体八割が女性でございます。そして、貧しくて独り暮らしになったら本当に大変ですね。

男の人は誰に介護してもらいますかというの一に妻、二に妻、三に妻、四・五がなくてという感じですよ。圧倒的に配偶者と言う。しかし、これももはや男の方の錯覚だと申し上げたい。きょういらつしゃった男の方は、最後に誰に介護してもらいたいのか。長生きする気なら、妻におっしゃらないでください。

さだまさしさんが、「俺より先に死んではいけない」などと歌ったのは、まだ人生五十年社会の残像が生きる時代に歌ったのです。

八十代を過ぎれば夫も妻も要介護状況であり得ます。じゃあ子供はどうか、嫁はどうかと言いますと、何たって老老介護です。皆さん、八十五―九十歳になる時に一番上のお子さん、ないしその配偶者が幾つになっているか考えてください。息子も婿も、まずは六十代ですね。私たちは人生五十一六十年の残像の中を生きっていると、

ます。どの時代を通して守るべき伝統、これはしっかりと守らなければいけません。

同時に、歴史の波に洗われながら、そしてこれはよくないと思ったら、勇気を持って不適合になった伝統は断ち切るべきです。女性に対する差別もその一つです。一九九五年、北京の女性会議の議長を務めたナフィス・サディックさんはパキスタンの出身。その議長演説の中で万雷の拍手を浴びたのは、「私たちは伝統や文化という名にごまかされてはなりません。伝統や文化は、私たちが幸せになるためにあるのです。その文化や伝統が私たちの自由や自立を妨げるとしたら、それは文化・伝統の名に値しません。そのようなものにはしっかりと決別すべきであって、私たちは黙っていないで前進しなければならぬのです」という意味の発言でした。女性を差別するような文化や伝統は、やはり文化・伝統の名に値しないと切り切った。その言葉をしっかりと受け止めたと思います。

そして、高齢社会の新しい文化は我々が初代でございますから、私たちがつくっていくより仕方がない。たと

えば、ある人口学者の算定によれば、大正九年に五十歳であった人の両親生存確率は〇・二％、つまり一千人に二人しか、五十歳になると両親の生きている人はいなかった。片親生存確率で約八％。一九九四年の五十歳の人、両親生存確率が約二〇％、片親生存確率が七割を超えます。つまり、五十歳で両親ともいないという人はいまの世の中の大変な少数派です。

考えてみれば、昔から「人生五十年」と言ってきたのですから当たり前じゃないですか。大正九年頃の五十歳は、その家族の第一世代です。第一世代として、長男を迎えた嫁の上に君臨していればよかったのです。

いまの五十歳女性は自分の更年期。嫁を支えて孫育てを手伝いたいという思いと、自分自身嫁として、これから始まる舅・姑の介護。その狭間にいるのが、いまの五十・六十歳にかけての人々です。私は地方を回ると、よく言われる。「私たちは、舅・姑を介護する最後の世代、嫁に見てもらえない最初の世代ですね」と実に情けなさそうな顔をなさる。その現状認識は、半分合っていて半分間違っています。嫁に見てもらえない最初の世代とい

うことは、これはかなり当たっています。ならば、どうして、「私たちは家族にだけ頼らなくても、社会的にきちんと介護をしていくシステムをつくり上げた最初の世代です」と胸を張って言わないのですか。

舅・姑を看取る最後の世代とおっしゃるけれど、実はいま九十歳ぐらいの女の人はあまり舅・姑の介護をしていません。私の世代でも結婚当初から、舅・姑のどちらかがいなかったという人が少なくありません。ましていま九十歳ぐらいの、私たちの姑世代には、結婚する時、結構もう親はいなかったという人が多いのです。だって、昔の修身の教科書をご覧ください。親孝行として書かれているのは、もういまにも死にそうな親を背負っているのは独身の男の子ですよ。あれから数ヵ月後に、親は亡くなり、親を見送ってから、男は妻を迎えるという人が結構いたのです。

親の世代の寿命が短かった。それから、いまのように介護の重度化がなかった。口から物が入らなくなる時が寿命の尽きる時。子供が大ぜいたから、仮に長男が倒れたとしても、すぐ替わりがあったわけです。まあ、大

体長男の嫁に一極集中したんですが、少なくとも、お嫁さんは、自分の実家に対して何ら考慮せず、嫁いだ家の嫁として全力を尽くすことを求められたし、そう出来たということです。

昭和三十五年、日本の合計特殊出生率は、つまり、同一世代の女性が産むと推定される子供の数は、二・〇〇をマークいたしました。それ以降、ほとんど二を割っていると思うてください。丙午でドカッと下がってまた元へ戻るけれど、その後は決して戻ることなく、いま一・四三というところにあります。

ということは、子供を持たない人は持たない。産んでいる人がほとんど二人ちよつとです。私は家政大学の学生にも言うのです。「長女、手を挙げて」と言いましたら、本当に八割です。「皆さんの結婚相手は長男だな」と言うのと、「あらー」とか、「うわー」とか言います。

「長男は嫌」という思いがあるから、あの「写ルンです」のCMで、沢口靖子は宇宙人からプロポーズされて、宇宙人という異質の世界の人からプロポーズされてもひるまないのですが、一つだけ念を押したのが、「まさか長

男じゃないでしょうね」というのであります。

しかし、それはもうあり得ません。これからの結婚はほとんどが長男・長女の組み合わせ。だから、夫婦選択別姓制は皆様方はほとんど支持して下さっているようですが、何も皆別姓にしるというのではないですよ。あくまでも選択制です。良くも悪くも跡取りという考え方は本当は捨て去らなければいけないのですが。もしそういう考え方に立つならば、男も跡取り、女も跡取り、夫も跡取り、妻も跡取りという人がほとんどなのです、これからは。「うちの嫁は長男のいる家の次女だから」と言っても、私たちは雇用者社会に生きているんです。全就労人口の八割が雇用者です。だからこそ日本はここまで豊かになったので、ということは長男が北海道に行く、長女がアメリカへ行く。姓をどちらに名乗ろうと、半徑五十キロ以内にはこの次女夫婦しかいないということに、実家の両親が同時に倒れる。

こうなると、もう何番目とか姓をどちらを名乗っているということは関係なく、親子としてしなければならぬことはしなければならぬのです。親に対して全部介

護しろなどとは言っていない。社会的介護を入れなければどうしたって出来ませんけれども、平等に夫も妻も自分の親には自分の愛情のおもむくままに尽くすということが出来上がっていないから結婚控え、産み控えになっってしまうわけです。そのために結婚しないでいる。あえて言えば、この世の中には介護含みシングルというのが実に多いのです。

現にいま親を介護しているから結婚出来ないという人もいますが、そうではないけれど、この親は私が見るより仕方がない、妹は先に結婚してしまったし、兄はアメリカへ行ってしまったし、私が見なければというところで、結婚を控えている人がどんなに多いか。だから、男女平等でなかったらこの社会はもう回っていかないのです。

しかも、日本は高齢者の自殺率が非常に高い国です。特に日本の女性は世界第二位なのです。男性も高い方ですが、大体四〜七位ぐらいを行ったり来たりしております。また、高齢者の自殺率が一旦減ったのです、去年辺りからまた高まっているようです。とくに、

め、「社会的にあなたの老いをこうして見守っていますよ」という、「生きていていいのですよ」「体が不自由になっても生きることはいいいことなんです。皆してこうして支えますよ」というメッセージになっているということです。

それと同時に、やはり日本の女性は何とこののですか、自分自身というものを持つことが少なかったですから、他人に命じられて、他人に言われるように生きるということしか生きがいがなかったということも、とても大きなことではないだろうかと思っております。

私は、私自身絶対長生きしようと思っております。また自殺するのも一つの決定ということに、私はそんなに信仰心はない方ですからグラグラと揺れ動きつつ、しかし、日本の老女のいまの自殺率がそういう自己の選択というよりは、気がね自殺であるということ、自分自身の生きる柱を持たないゆえの気がね自殺であるということ、を思いますと、私どもが本当に年を取った時、WHOの数字を書き換えることの出来る、「日本の老女はしたたかに生き抜いて、まずは自殺をしない」と言われるくら

残念ながら、なぜか若い世代から自殺率が高いハンガリーを除くと、日本の老女の自殺率が世界一なのです。これは、なぜなのでしょう。

私がちょうど六十五歳になりましたから、もうだんだんそういうことはなくしてみせる自信を持っておりますが――。やはり日本の女性は、自分が家族の足手まといとか、家族の世話になると思った時とか、家族の世話をもう出来ないと思うと、何かもう役に立たないように思ってしまう。「気がね自殺」と呼ぶんだそうですが……。ですから、意外と独り暮らしのお年寄りは自殺しないのです。むしろ、一応田舎な大家族で三世帯同居の多い地域に自殺が多い。日本の中でも新潟県が一位、秋田県が二位です。

新潟県の在宅福祉サービスをしている知り合いのドクターが言いました。「調査はないけれど実感として」ということでしたが、デイサービスとかショートステイとか、そういうサービスが整った地域では、自殺が減っているようだ。

つまり、福祉サービスは、家族の介護の手を少し休

いの生き方を皆さんと一緒にしていこうではありませんか。

五

まだまだいろいろ話したいことがたくさんございますが、時間が尽きたようでございます。最後に一言だけ申し上げたいのは、どうぞ、皆様の夫を自立した男に育てていただきたいということです。

というのは、妻の方が先に倒れた時、夫による殺人と心中未遂というのが日本ではかなり起こっているのです。これはやはり伝統的な幾つかの理由があると思いますが、この頃、少し様子が変わってきた面もあります。

一九九〇年以前もいまも共通するのは、やはり男の人が生活者として自立出来ていないこと。だから、すぐギブアップしてしまう。それから、妻の命は俺のものだと思っている所有意識。これは、いま女性問題の一番の重点になっていて、世界的に研究者や行政も一生懸命に取り組んでいる女性への暴力の問題に通じています。

他人の女を殴ったら大変なのに、なぜ女房を殴って平

気かというところ、やはり所有意識ですね。所有と支配の関係、だから、妻の命は俺のもの。本当は妻は、倒れはしたけど痛い痒いがあるわけではなし、食べる物もどうやら口から入り、桜を見ればきれいだと思う。夫は、「おまえももう生きていても望みがあるまい。そんな体になって……」と。そんなことない。ひ孫の顔も見たい。なのに、「俺ももう疲れた、一緒に死んでやる」なんて言われて……。やめてくれって言うのですね。これは、やっぱり妻の命に対する所有の感覚であります。

それからやはり男の人は、行政に対して「ヘルプミー」と、行政や隣近所に「助けてくれ」というのが、「男は黙って」の美学を教えられているから、言いにくかった。しかしこれは、一九八〇年代の男性ですね。この頃の無理心中を見ますと、やはり男の人が八十代半ば。妻が七十代半ばでボケている。そして行政に「ヘルプミー」を言っているのですが、それでは足りないのです。

これは長野県で三月（一九九七年）にあった例です。夫は自分も肺炎を起こして入院した。重度の痴呆で徘徊

がある妻、その上インシュリンの注射を必要とする持病をお持ちです。一般の特別養護老人ホームやショートステイで入院の間だけ引き受けてくれることはありません。病院付属の老人保健施設でやっと一週間預かってくれました。肺炎の治療はすんだからと帰された八十五歳の夫の体力がどの程度だろうか。それに合わせたように老健施設のショートステイの期限が切れてしまいました、非常に仲よく面倒見てきた方だそうです。

八方手を尽くして「ヘルプミー」を言ったのだけれど、預かってくれるところはなく、夜寝ずに声を上げ、夫を呼ぶ妻の介護をしなければならなかったというのが退院第一夜なのです。子供は四十代の独身。まさに介護シングルでしょうね。一家を支えるために、その息子さん（が）昼間は外で働いています。日本のごく普通の市民の家庭の風景です。事件は、その退院した翌日に起こりました。「いまの世に、どうして私たちはこう長生きしたのでしょ……」という始まりの遺書を書いて。そして、「すみませんが、後を頼みます」と結ばれた、広告の裏か何かに走り書きの遺書を残して、コタツにいた

妻を絞殺し、そして、その上でこのお父さんは職場の息子に電話をかけて、「すまないことをしたが、よろしく頼む」と言っただけを出た。息子さんが飛んで帰って来たら、お母さんが死んでいた。やがて信濃川の欄干に首を吊って果てている父を見つけた。これが、日本の介護の現状です。

一体、こういう現状をよくするためにどうしたらいいでしょうか。公的介護保険についてもあれが最良の道とは私も必ずしも思っておりません。しかし、何らかの社会的な介護サービスの道をつけるのは緊急の課題です。

家族だけでやれると思っていたのは人生五十年社会なのです。いまこの社会におきましては、社会的なサービスの網を張り巡らすこと、これは家族を根幹で支えるためにも、社会的サービスのもう一歩も二歩も進めなければいけない時代になってきています。スウェーデンやデンマークの人に会うと言われます。「日本は女の人（が）余りにもいいお嫁さんだったので、福祉が遅れたのではないですか」。東大の上野千鶴子教授に言わせると、「よい嫁は福祉の敵」ということになります。日本の女もい

い女ぶりっ子をやめて伝統の中から外れた新たな女性像をつくるより仕方がありません。私などは、憎まれ続けて三十年。気持ちがいいです。

六

いろいろ言っていました。「男の人よ、自立せよ」と言っていました。いろいろ言ってきたけれど、それをいまや別にフェミニストでもない男の人が自分の学問分野から言うようになりました。中村丁次さん（聖マリアンナ大学）という栄養学の先生がいらっしやいます。この方が、「何で男と女はこんなに平均寿命に差があるのか」とつくづく見た結果、もちろんDNAの差とかいろいろな差があるだろうけれど、その一端は食生活のあり方にあると。学者の立場から見てもどうも女性の方が健康的なのだそうです。私はNHKラジオで「食生活を女性化せよ。十カ条」とおっしゃっているのを聞いて、たちまち「高齢社会をよくする女性の会」で、昨年の北海道大会にパネリストとしてご出講いただきました。

十カ条あるのですが、他人の受け売りで長くしゃべる

と著作権にかかわるかもしれませんので、三つだけ言います。ジェンダーを超えて、男女平等でやっていこうという思想とピタリ一致するのが、少なくとも三つあります。

一つ、あまり外で飲んだくれないで、早く家へ帰って家で食事をせよ。その時大事なことは、妻のくだらないと思われる話にじっくりと付き合って、妻と対等にゆつくりと話し合いをすべし。つまり、ゆつくり食べることが健康に叶っているのだそうです。出来るだけテレビでも観ながら、テレビに出て来るような人を含めて、当たり障りのない悪口でも言いながら。妻の「きょうねー、団地の角にね、死んでいたのよ。それがね……」なんて言うとき、もう大抵の夫はイラック。「何が死んでいんだ。結論を言え、結論を……」、こういう人は早死にします。

二番目、自分で献立を立てて買い物に行つて、そして料理をつくるべしとおっしゃるのです。これぐらいボケ防止、献立を立ててつくるなんていうのは、ものすごい頭の使い道だそうですよ。それと、買い物をするという

のはやはりかなりストレス発散になりますよ。女の長生きは、毎日買い物をしているから。だって、きょうどの献立つくるかというのはささやかながら自己決定ですよ。夫は、「きょうはサバ食いたい」と思ってもサンマ食べさせられたりね。

やはり、自分の食べたい物を自分の意思で決定してつくるとするのは、これは長生きにつながると男の栄養学者が発見してしまった。買い物をする。つまり、ここでストレス発散して、酒で押し殺すようなストレス発散を出来るだけやめよ。

見破られたと思いましたね、私は。日本の女は毎日買い物をしている、本当だ。でも、私だって、男の人には条理を尽くしていままでも何度も言ってきた。買い物ぐらい行きなさい、スーパーへでも買い物に行つてきょうの献立を立てながら野菜や魚や肉の鮮度などを現場で見たら、どれだけ仕事にも役に立つかわからないなんて言っても、間接的だからなかなか説得力がない。それよりも、買い物に行くと、店の親父さんが嫌なんですよ。「奥さん、病氣？」なんて聞くから。八百屋・魚屋のお

うさんたちを集めて、ジェンダーを超える男女平等研究というものを本当に商工会や何かでやってほしい。夫が買い物に行った時、さり気なく接すること。これはサービスマンとして大事なことです。

スーパーならば、さり気ないですね。誰も、「奥さん、病氣？」なんて聞きはしない。この頃変わってきたけれども、ある時期までの男は、デパートの紙袋ならいいけれど、スーパーのポリ袋を持っていると、近所隣の奥さんがジロジロ見ると意気地なくも言っていました。私は、「何で恥ずかしいのですか。育児をしない『育児無し』男のほうがよくばど恥ずかしい。もし、それを変な顔して見る人がいたら、スーパーの袋を前へ突き出して、これが本当のスーパーマンと言っておあげなさい」と、私は励ましてきたのであります。

ようやくスーパーマーケットに男の姿を見えるようになったけれど、でも中村丁次先生の、「そうした方が長生きするよ」という説得の仕方は、大いに魅惑的であります。

三番目の、極めつけはこれです。したたかに飲む、タ

ラフク食らう。「ああ、夕ご飯はおいしかった」。特に御酒を召し上がる男性は、ここでボタンキューと寝てしまふのが至福の時だそうです。そういう時であっても、しばらくは地球と垂直になっているのがよろしい。満腹のままですぐ寝てしまふのは一番健康によろしくないそうです。

そのための最もよい手段は、妻とともに流し台に立つて後片付けをすべし。私は、これまでどれだけ男性の家事参加、育児参加、生活者としての自立の必要を説いてきたかわかりません。おかげさまで家庭科の男女共修は実現いたしました。しかもそこへ、男女平等に長生きするため一緒に後片づけをしようという呼びかけは、いかにも魅力的であります。

いろいろ紆余曲折を経ながら、この世の中が変わっていくところを見ますと、まだまだ女性が差別されていることは山ほどございますが、世の中の趨勢は男女が仲よく長生きするためには男女平等こそ必須条件ということでありまして、本当に男を大切にす妻は、男の家事参

加を厭わない妻であると申し上げて、きょうは夜遅くまでお付き合いくださいました皆様方の夫ともども長生きなさることを信じ、お別れしたいと思います。どうもありがとうございました。

(ひぐち けいこ・東京家政大学教授)

(本稿は一九九七年十一月二十日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆していただいたものです)

——文責・編集部